

続 石斛と木斛

夏井 高人

1 問題が残っている

日本の古文献中にみえる石斛と木斛の謎について、本誌 2013 年 3 月号 (426 号) 10~17 頁に記事を書いた。

なにしろ随分と昔の用語例なのだが、古来、日本では、石斛と木斛とは同じ種類の植物であるセッコク (*Dendrobium moniliforme*) を意味し、ただ、石斛は主に岩に生えているものを指し木斛は主に樹木に着生しているものを指すと理解されてきたようだということが理解することができた。

しかし、本家本元の中国に自生しているデンドロビウム属植物と日本のそれとは異なるので、単純な比較はできない。過去の日本の本草学者は、中国に自生する多種多様なデンドロビウムの実物を目にすることなく考察していたはずだ。それゆえ、「木斛」の理解について本質的なところで間違いが含まれているかもしれないという疑問が生ずることになる。

とはいえ、中国においてもラン科植物の分類が正確になされるようになったのは、そんなに昔のことではない。そもそも生薬の原料としての価値観 (効能等) に基づく古典的な分類はあったのだろうと推測されるけれども、西欧流の植物学が主流になったのは比較的最近のことだ。したがって、古い時代において「木斛」が何を指していたのかを確定することはやはり難しい。

そこで、次善の策として、現代の中国において、どのような植物を「石斛」または「木斛」として調べてみることにした。それによって、少なくとも現代における中国の植物学者の認識を知ることができるし、そこから過去の認識を推測することができるかもしれない。

2 『中国植物志』における取り扱い

現代の中国で最も権威のある植物学上の文献は、中国科学院中国植物志編輯委員会編『中国植物志』（科学出版社）だとされている。これは、非常に大規模な書籍なのだが、その第 17 巻、第 18 巻及び第 19 巻の 3 つの巻にラン科植物が収録されている。更にその中で石斛すなわちラン科デンドロビウム属に属する植物に関しては、同書第 19 巻（1999）に収録されている。

この第 19 巻を読んでみると、「石斛」とは、『中国高等植物図鑑』を典拠として、「*Dendrobium nobile* Lindley」を指すものと記載され（111 頁）、また、「木斛」とは、『台湾植物目録』を典拠として、「木石斛」を指すものとされ、そして、「木石斛」とは、『植物分類学報』を典拠として、「*Dendrobium crumenatum* Swartz」を意味するものと記載されている。

デンドロビウム・ノビル (*Dendrobium nobile*) は、とても美しい花を咲かせるデンドロビウム的一种で、中国、台湾、東南アジア等に広く分布しており、色とりどりの園芸交配品（ノビル系デンドロビウム品種）の親種としても知られている。他方のデンドロビウム・クルメナツム (*Dendrobium crumenatum*) は、全体に白く唇弁の一部だけがレモン色の花を咲かせるデンドロビウム的一种で、比較的珍しく、台湾（離島部）と東南アジアに分布している。

現代の中国科学院は、石斛と木斛をこのように理解していることになる。

3 何が問題か？

デンドロビウム・ノビル (*Dendrobium nobile*) とデンドロビウム・クルメナツム (*Dendrobium crumenatum*) は、どちらも日本国の領土内に自生していない。日本国の領土内に自生しているセッコク (*Dendrobium moniliforme*) とは全く異なる植物だ。日本のセ

ツコク (*Dendrobium moniliforme*) は、中国では「細茎石斛」と呼ばれている。

このことから、大きな問題が生ずる。

日本の古文献において「石斛」及び「木斛」と記載されている植物がセッコク (*Dendrobium moniliforme*) を意味することは疑う余地がないと思われる。しかし、正確には、中国の「石斛」及び「木斛」がどのような植物を指すのかについて当時の本草学者らは知らなかったはずなので、想像によってその名を宛てていたのに過ぎないと考えられる。現代の中国で認識・理解されているところの「石斛 (*Dendrobium nobile*)」も「木斛 (*Dendrobium crumenatum*)」も、当時の日本には存在していなかったし、現在でも自生としては存在しない。要するに、日本の古文献には名だけあって、その実が存在しないのだ。

このように、「石斛」という名を厳格に用いるとすれば、結構面倒そうなことが生ずる可能性があることを頭のどこかに置いておくことは大事なことではないかと思う。

ただし、ここで問題にしている「石斛」と「木斛」は、その狭義の語義のことだ。

広義の語義としては、現代の中国語としても広くラン科デンドロビウム属の植物全部を指すものとして「石斛」が用いられている。その意味では、日本における「石斛」の用例が必ずしも間違っているというわけではないということにも十分に留意すべきだろう。実際問題として、日本語において最も広い意味で「石斛」を用いる場合、セッコク (*Dendrobium moniliforme*) だけではなくキバナノセッコク (*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*)) とオキナワセッコク (*Dendrobium okinawense*) の3種全部をまとめて意味することがある。

さて、現代の中国における「石斛」と「木斛」の理解についてはこれで分かったことになる。

問題は、過去の中国ではどのように理解されていたかということになりそうだ。

更に調査・研究した上で、機会があったらその検討結果を公表しようかと思う。

お詫びと訂正(正誤表)

本誌 2013 年 3 月号 (426 号) に掲載された「石斛と木斛」にミスタイプがありました。お詫びして訂正します。

10 頁	(正) 大橋氏の講話 (誤) 大橋氏の講和
14～15 頁	(正) 『本草綱目』 (誤) 『本草項目』



Dendrobium nobile Lindley

(2013年3月・筑波実験植物園で撮影)



Dendrobium crumenatum Swartz

(2008年7月・筑波実験植物園で撮影)